

<資料>

## 2021年度教職相談活動報告

片山敬子

### はじめに

今年度も昨年度に引き続き、コロナ感染防止のため、相談活動を原則リモートで行うことからスタートした。年度の初めは新規学生が多く、直接予約を取りにやって来る学生もいたが、回を重ねる中でネット予約が主流となった。ただし、ネットでのやり取りがスムーズに行われることは稀で、2～3往復の確認が必要となることもある。対面だと日時だけでなく、周辺の事情も加味できるので、よりきめ細やかな対応が可能となる。時期・時間・タイミング等制限がある中での効果的かつ効率的な相談活動を模索していくこととなった。

### 1 相談概要

相談の内容としては、教員採用試験の準備や対策についてが多かったものの、相談にやって来る時期としては、総じて遅い印象をもった。筆記試験対策については、3年後期からのスタートを促していたが、先ずどの自治体を受験するかが絞り込めていなければ、教員採用試験の出題傾向や問題レベルの分析に至ることはない。また、中高免許取得予定者にとっては、自分で中学校教員を目指すのか高校教員を目指すのか4年の4月段階で決め切れていない学生があり、中高免許取得を予定しながら、具体的な教職への道筋が十分に整っていないケースがあった。さらに、教職への明確な意思決定を持たないまま相談にやって来る学生もあり、民間での就活もしながら、教員採用試験も受験する、あるいは教員採用試験を受験するが、院試も受験するといった進路に選択余地を残した取り組み方が昨今増えてきているように現状を捉えている。

### 2 教員採用試験に向けての取り組み

一昨年度までは、教員採用試験受験者を対象として、外部講師を招いて集団での面接指導を行ってきたが、今年度もコロナ感染防止に配慮し実施を見送った。教員採用試験においても集団で面接を行う自治体が減り、人物重視の観点から個人面接をじっくりと時間をかけて行ったり、集団で行う場合でも集団討議であったり、グループワークであったりといった従来とは異なった集団面接の形態となってきた。

今年度は教員採用試験を受験する相談者の内訳は、例年に比べて小学校が少なく、中学校・高校が多い傾向にあった。しかも、幼稚園及び特別支援学校を受験希望する相談者が1名もいなかったという事実には大変驚いた。相談者の人数としては、地域学部が圧倒的に多いけれども、中高受験の農学部の学生が例年より多かった。しかしながら、学部が異なると授業で交わることが少なく、コロナの影響で人間関係も広がらず、受験者同士のつながりや協力体制は学部内のみに限られた狭小なものになっていた。そこで、同一自治体の小中高を受験する学生を集めて、一緒に集団討議の模擬練習を試みた。受験校種が異なるので同じ討議題であっ

でも視点が異なり、自らの意見を人の前で発表したり、他人の意見と比較し論理の甘さを実感したりするなど、互いにとってよい刺激となったようであった。その関わりは、一次・二次試験、結果発表そしてそれぞれの来年度の方向性が決まった今も続いており、卒業以降も共に励まし支え合える仲間として、教職の世界でも互いに高め合ってほしい。本人たちから聞く「知り合えてよかった。」という一言。改めて、コロナ禍の中での人間関係づくりの難しさを実感すると同時に、「コロナ禍だからこそ知り合えた仲間」と言えるのかもしれない。

### 3 「学び・つなぐ」プロジェクトのコーディネート

今年度は、「学びの教室」5コマ、「学びの座談会」1コマ、「つなぐ教室」4コマ、「つなぐ座談会」1コマのコーディネートを行った。計11コマの参加人数の総数は595名であった。

「学びの教室」5コマは、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校からそれぞれ講師の先生をお招きし、進路選択の動機や教師としてのやりがい、教員としての信念や夢など、個性豊かな先生方から生の声をお聞きする貴重な機会となった。「学びの座談会」では、本学出身の2名の先生方から学生時代に取り組んでいたことや教員になって役立った経験、さらに採用になって即求められる力とはなど、来年度4月から教壇に立つ学生や将来採用を目指す学生が熱心に話に耳を傾けていた。特に、小学校（県内出身者）と中学校（県外出身者）からお招きしたので、校種ごとに学校課題が異なっていたり、小中連携の実態が分かっていたりなど、幅広く興味深い話題に対して全員が質問を行い、とても有意義な時間となった。「つなぐ教室」では、教育行政の立場から県教育委員会には教職への準備段階としてのスタート期から完成期までの道のりについて考えていく中で、求められる教師像のイメージを具体的に捉え、今後の自分の見通しを考えることにつながった。アルゼンチンとイタリアの在外日本人学校から帰国された先生方からは、コロナ禍の中における異国での生活様式や学校での子ども達の学びの様子、日本人学校の教員としての役割や奮闘、異国ならではの日本人に対する見方や垣間見える独特な価値観、歴史や伝統に彩られた現地固有の生活感、肌で感じられた空気感等々が写真や動画を通して生き生きと伝えられ、学生の心に強く響くものが後に残った。

### 4 成果と課題

このところ毎年のように、教員採用試験の相談開始が4月という学生が圧倒的に多く、その結果一次試験の準備が十分にできなかったとの反省をよく耳にする。初めて受験する学生だから、先が予見できなくても仕方がない部分もあるけれど、進路の複雑化も視野にあるからなのか、若干見通しの甘さを感じる。春休みを有効活用できるよう先輩から後輩への声かけを頼りに3年生へのアプローチも行いたい。準備を確実にするためには、事前の情報収集と自分の特性を踏まえた厳しめの見通しを持つことが必要である。一次試験の結果が出てから二次試験の準備、いかにも順当な準備のようであるが、現在の試験日程では一次が終わったら結果を待たずに二次に備えるのが常套である。確かに一次を失敗したら二次の準備は無駄という短絡的な考え方に陥りがちになるが、単に結果（合格）だけを目指にするのではなく、教員採用試験に向き合う過程の中で自分自身を学び、他とつながり、社会を広げていくことを通して、生き抜く力を備えた逞しい人間力を培うことにもっと目を向けてほしい。

片山敬子（鳥取大学教員養成センター）